

# 内科認定医と医学文献の関わり

## 日本内科学会認定内科医の病歴要約作成に必要な文献

竹内法広<sup>1)</sup>、平嶋登志雄<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>千葉徳洲会病院病歴科、<sup>2)</sup>千葉徳洲会病院顧問

### 1．病歴要約の文献の必要性

当院は厚生労働省臨床研修指定病院である。研修医の研修はもとより医師も専門的な医療の質の向上のため積極的に認定医制度に参加している。

例えば、内科認定医制度は医師が関わった患者の症例報告が計 18 例必要であり E B M からの症例報告となる。内科分野 12 例、外科転科もしくは外科担当症例 3 例、救急 2 例、剖検 1 例である。

認定の症例報告は病歴要約の書式に従い報告する。医学文献は専門的な症例報告の裏付けであったり症例経験との比較に活用することにより説得力のある報告になり、医学文献が非常に重要で内科認定医取得と医学文献の関わりは大きいのである。

一般に医学文献は学会、研究会、院内勉強会などに必要とするが、内科に限らずすべての分野で専門的なライセンスの修得の為の補助的存在でもある。

### 2．具体的な病歴要約と文献の関わり

#### 1) 入院後経過・考察の作成

病歴要約の【入院後経過】・【考察】を作成するがそれぞれ医療行為、最終診断、画像診断、臨床試験、投薬について細かいデータをまとめる。特に医療行為、臨床試験に関しての文献はその病歴要約の本文の構成に不可欠なものである。

#### 2) 手術記録の作成

カルテの手術伝票の記録物から手術した術式、行為などを見て認定医のための手術記録の作成をする。文献から得た術式、行為の例などを参考に実際関わった症例と比較したりする。

#### 3) 剖検報告書の作成

内科認定の中で外科的な分野との関わりを持つ剖検報告書は専門知識として必要に応じて文献を検索することや文献入手する事は必要となる。

---

### 参考文献

日本内科学会雑誌 病歴要約作成の手引き 94 : 2005

石丸裕康 (天理よろず相談所病院 総合診療教育部)

臨床研修プラクティス V o l . 2 N o . 4 P 60-65 (2005.03.15)

## 臨床医の診療のための情報提供方法に関する研究

阿部信一、武山由紀、古関美津子  
東京慈恵会医科大学学術情報センター

### 目的：

現在、診療に必要な情報の入手方法は、従来の図書館での文献検索・文献複写に加えて、ネットワーク上のデータベースや電子ジャーナルなどから情報を得ている医師が増えている。そのような各種情報源の契約や利用環境の整備が図書館等の重要な業務になっているが、臨床医にとってより有効な情報サービスのあり方について検討することを目的に、臨床現場での情報提供サービスに関する調査を計画した。

### 方法：

医師が診療に当たって情報が必要になったときに調査依頼票に記入してもらう。それらを図書館員が回収し、データベースの検索、文献の選択・複写を行い、依頼ごとの「ポケット」として提供する。医師はそれらの情報について、診療後に提供された情報の内容や量、診療行為への有効性等を評価票に記入する。今回の調査には腎臓・高血圧内科の協力を得た。また、今回の調査では文献情報の提供を優先し、医学中央雑誌 Web 版と JMEDPlus での検索を第一選択、次に MEDLINE ( OVID ) を検索した。補足的に、UpToDate や今日の診療の関連情報も調査した。

### 結果：

2006 年 1 月 24 日 ( 火 ) ~ 2 月 6 日 ( 月 ) の月曜 ~ 金曜に調査を実施した。調査依頼票は合計 11 件回収された。疑問内容は、腎臓・高血圧に関連したものはあるが多岐に亘り、これまでの調査と同様に診断に関するものが多かった。また、提供された情報は 4 割が「適当」または「やや適当」との評価だが、それらによって診療行為が変わったとの回答はなかった。情報の有益性や満足度はある程度高かった。

### 考察：

今回の調査では、専門性の高い診療科を対象に行ったが、以前に調査した総合診療部での結果と同様に診断に関する依頼が多く、求められる情報の範囲も基本的なものから専門的なものまで幅広い疑問が示された。提供情報の内容の適切性や満足度は以前の調査よりも高くなったものの、どれでもあまり高いとは言えない。今後はさらに調査によって臨床現場で求められる情報の特徴の分析を進め、ネットワーク上で提供する情報源や、情報サービスを行う専門職に求められる要件等についてまとめていきたい。

なお、今回の調査は、平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金 ( 医療技術総合研究事業 ) 「患者 / 家族のための良質な保健医療情報の評価・統合・提供方法に関する調査研究」の分担研究として行った調査を基にまとめたものである。

## 『医学図書館』誌をつくってきた人々

- 執筆者と編集委員の分析を通して -

城山泰彦

順天堂大学図書館

### ・【はじめに】

NPO 法人日本医学図書館協会の機関誌『医学図書館』は、2006 年で 53 巻を数える雑誌です。筆者は 2002 年 7 月から 2006 年 5 月まで『医学図書館』編集委員を経験して、執筆者と編集委員が、一部の加盟館に偏っている印象を持ちました。『医学図書館』誌が協会機関誌として多くの読者に支えられていくためには、加盟館員をはじめとする幅広い執筆者の確保や、多様な考えを持った編集委員が参画することが不可欠と感じています。

今回の調査では、執筆者と編集委員の分析などを通して、本誌の置かれている現状を鑑みることを目的としました。

### ・【調査方法・調査項目】

『医学図書館』創刊号（1954 年 1 月発行）から調査時点の最新号 53 巻 1 号（2006 年 3 月発行）までの、218 号を調査対象としました。そして執筆者（editorial や加盟館員外の執筆などを除いた約 2,800 題）と編集委員について、機関・館種別の傾向、時期的な傾向などを調査しました。また加盟館職員数の推移について、『NPO 日本医学図書館協会加盟館統計』の第 61 次（平成元年度：1990 年）から第 76 次（平成 17 年度：2005 年）により調査しました。

### ・【調査結果】

およそ半世紀にわたる『医学図書館』誌の歴史の中では、関東地区の（比較的職員数の多い）私立医科大学によって支えられている結果となりました。時期によって多少の変動はありましたが、近年は特に、この傾向が強い印象を受けました。

また、2005 年の加盟館の専任職員数は、1990 年のおよそ 80%にまで減少していました。近年の変化の大きな業務内容などを考えると、図書館員が日常業務で忙殺されている様子が伺えます。このことから、執筆者を確保することが難しいうえ、編集委員のなり手の確保については、それ以上に悩ましい状態となっています。

2006 年 6 月からは、これまで関東地区の医学図書館・病院図書室から選出されていた編集委員を、東海地区、近畿地区、個人会員、医学図書館以外の加盟館からも選出することになりました。幅広い館種の加盟館や個人会員、ひいては加盟館外からの多様な考えの編集委員が集まることによって、本誌の発展につなげられればと願っています。

そして、今回の調査により明らかになった点を踏まえて、本誌のこれまでの傾向と、予想される今後の傾向について考えていきたいと思えます。

## 看護学教育分野における引用文献の比較調査

松坂敦子

埼玉医科大学保健医療学部図書館

### 目的

看護学の教育分野におけるコアジャーナルの動向を探るため雑誌論文の引用（参考）文献の調査を行った。昨年行った研究分野の調査では、対象誌が『看護研究』誌1誌だったため、34年間の調査ではあったが、相対的な評価を下すにはいたらなかった。今回は、調査対象誌を3誌とすることで、相対的な傾向を探るとともに、調査対象誌別データと比較と第一著者の所属別データの比較を試みることにした。

### 調査対象

調査対象としたのは、「日本看護学会論文集（看護教育）」、「日本看護学教育学会誌」、「看護教育」の3誌である。調査期間は、『日本看護学会集録』から『論文集』に変更された1998年から2005年の8年間とした。調査対象論文は、コラム・エッセイ・対談等と外国人著者による論文を除いたものである。

### 調査方法

調査対象3誌の引用(参考)文献の雑誌論文をリストアップし、誌名をWebcat・PubMed等で確認を行った。これらの調査で確認できなかった雑誌については、医中誌 Web・J-Dream・MEDLINE等で調査を行い、巻・号不一致や、大学の紀要等で分野が分かれているにもかかわらず記載のなかった文献については、雑誌記事索引で確認し、確認できなかった文献については、所蔵館に書誌調査を依頼、または文献の複写を取り寄せ確認を行った。その上で、下記の項目について調査を行った。

1. 引用(参考)文献欄に書かれている雑誌のランキング
2. 調査対象論文の雑誌引用比率
3. 外国誌と国内誌の引用比率
4. 引用年代
5. 自誌引用比率
6. 雑誌別引用（1つの論文で引用された雑誌が他の論文でも引用されているのかどうか）
7. 第一著者の所属調査

以上7項目について、3誌合計のデータによる分析と各誌別の分析、そして第一著者の所属別にみた3誌合計のデータ分析と各誌別の分析から傾向を探る。

# 「医学図書館」誌における Book Reviews 記事の分析

大谷裕

東京医科大学図書館分館

## 背景

NPO 法人日本医学図書館協会の機関誌である「医学図書館」では「Book Review(s)」というコーナーが設けられています。このコーナーは「批判的であるより報知的な書評を、できるだけ広い観点から取り上げる」<sup>1)</sup>ことを目的として原稿を募っており、毎号、様々な資料が紹介されています。「医学図書館」誌において、このような資料紹介を目的とした記事は1巻2号(1954)の「ブックレビュー」コーナーで「British Medical Bulletin」が取り上げられたことにはじまり、最新刊53巻2号の「Book Review(s)」コーナーまでに、述べ501点の資料が取り上げられてきました。1983年の30周年アンケート<sup>2)</sup>、2004年に行われた「医学図書館」50巻記念読者アンケート<sup>3)</sup>においてもそれぞれ「よく目を通す記事」の上位に位置し、読者から好評を得ていることがうかがえます。

## 目的

今回、「医学図書館」誌がどのような方向性で資料紹介記事を掲載してきたか、また記事の執筆者(=「医学図書館」誌の読者)がどのような本に興味を持ってきたかを調査し、「医学図書館」誌における「Book Review(s)」コーナーの役割を考えてみたいと思います。

## 方法

- (1)「医学図書館」誌における資料紹介記事の変遷をまとめ、経年的な動向を探る。
- (2)資料紹介の記事内容から分類を試み、記事の特色と傾向を明らかにする。

また、会場では本誌が今まで取り上げてきた資料をほんの一部ですが、展示して実際に手にとってご覧いただきたいと考えています。

## 【参考文献】

- 1)「医学図書館」編集委員会。「医学図書館」執筆ガイド2005年版：医学図書館 2005；52(1)：105 - 107
- 2)「医学図書館」編集委員会。「医学図書館」読者アンケートの集計結果：医学図書館 1983；30(2)：154 - 169
- 3)富田麻子。「医学図書館」50巻記念読者アンケート集計報告：医学図書館 2004；51(1)：33 - 46

# 医学中央雑誌を使った日本の看護文献 電子化の現状報告とシミュレーション

児玉 関<sup>1)</sup>、松田 真美<sup>2)</sup>、黒沢 俊典<sup>2)</sup>、佐々波 裕子<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>杏林大学医学図書館、<sup>2)</sup>NPO 医学中央雑誌刊行会、<sup>3)</sup>杏林大学保健学図書館

## 1.はじめに

電子ジャーナルにとって、文献書誌データベースとのリンクは、特徴のひとつである。検索結果から該当文献をすぐに見られる便利さは、電子ジャーナルならではのメリットといえよう。学術雑誌の電子化は 1990 年代中頃に始まり、現在では、ほとんどの医学系洋雑誌が電子ジャーナルで提供されている。PubMed では、LinkOut という機能を使ってのべ 5000 以上の雑誌とのリンクを実現し、電子化のメリットを活かしたサービスを実施している。

一方国内に目を向けてみると、雑誌の電子化およびデータベースとのリンクは、大幅に遅れている。したがって利用者は、和雑誌については、電子ジャーナルならではのメリットを享受できないのが実情である。そこで本調査は、看護分野の文献を対象を絞って和雑誌の電子化の現状を報告するとともに、看護系和雑誌が電子化された場合の影響度を明らかにすることを試みた。

## 2.対象と方法

看護文献は、医学中央雑誌（以下、医中誌）のデータベースから抽出した。条件は、2006 年 5 月 16 日現在で医中誌に収録された文献で、2003～2004 年の間に出版され、且つ、分類が看護のものとした。抽出された看護文献を掲載する雑誌を看護雑誌とみなし、それらの雑誌の電子化状況を調べた。

なお現在の医中誌には Pre 医中誌データというものがあるが、それらのデータにはまだ看護分類のチェックがつけられていない。したがって Pre 医中誌データについては、今回の対象から外した。

## 3.結果

結果は表 1 の通りである。看護文献は全文献の約 6%、看護雑誌（看護文献を掲載している雑誌）は全体の約 35%であった。

この結果に関する考察は、発表で行う。

表 1. 文献数・雑誌数

発行年	全文献数	看護文献数	看護文献率(%)	全雑誌数	看護雑誌数	看護雑誌率(%)
2003 年	301,159	19,757	6.56	2,378	856	36.00
2004 年	296,871	17,962	6.05	2,345	830	35.39

# 長野県医学図書ネットワークの発足により

## 長野県病院図書室アンケート

前澤好広<sup>1)</sup>、中村雅子<sup>2)</sup>、佐々木絹江<sup>3)</sup>、小林紀子<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>長野赤十字病院、<sup>2)</sup>大阪府立母子保健総合医療センター、<sup>3)</sup>佐久総合病院

<sup>4)</sup>飯山赤十字病院

長野には、以前より長野県内の病院図書館のネットワークを望む諸先輩がたの声は有りましたが。全国都道府県の中で四番目の広さ南信の飯田市から県庁所在地の長野は東京へ行くより時間がかかります。また地形が大きな障害となっていました。県歌「信濃の国」に歌われているように、飛騨山脈、赤石山脈、三国山脈、関東山地に周囲を囲まれ、県内は木曾山脈、八ヶ岳、筑摩山地により分断されており、生活圏は、大きくは、四つの盆地に分かれています。それ以上に分断され、その間を一級河川の、千曲川、梓川、天竜川、木曾川が流れ、常に峠を越え、橋を渡らないと隣の生活圏にはいけない状態でした。これが県内の交流を妨げる要因になっており保健医療計画にも大きな影響を与えていました。

これは長野ということだけでなく、日本の風土、知的部門基本部門への投資において、図書室つきまして、医療事業において目に見えるに収入がないため整備、設置がおくられていました。

病院機能評価において、図書室の設置、時間の利用が求められるようになり、既存の図書室の見学がおこなわれ図書室の整備が進み始めました。病院図書室の担当者の方も近畿病院図書協議会、病院図書室研究会、日赤図書室協議会等の団体に入会し、積極的に知識を吸収しようとする方も出てきました。

近畿病院図書室協議会が、昨年八月長野におきまして、サマーセミナー2005を開催するにあたり県内67の医学系大学、病院に図書室の設置、業務等のアンケートを出しましたところ2大学、12病院からの解答をいただきました。回答率は21%でした。病院では200以上の公立、公的病院で、飯田市立病院、県立昭和伊南病院、伊那中央病院、諏訪中央病院、諏訪日赤病院、佐久総合病院、県立こども病院、安曇赤十字病院、長野中央病院、飯山赤十字病院、長野赤十字病院と、大学では、信州大学、県立看護大学でした。それらの病院図書室は、兼務か専任の方がいました。専任といっても実質は兼任でした。これらの病院、大学がサマーセミナーを契機に長野県内の医学図書ネットワーク発足に向け動き始め昨年12月に発足しました。

ネットワークを作ることにより、情報交換の場が作られ、問題がおきた時は電話等で直に問い合わせが出来るようになりました。また雑誌、図書等の価格情報も交換し、前年より価格を下げてくださいたり、維持することが出来るようになり、価格の決定が業者と交渉できるようになりました。

県内での文献の相互貸借も活発となり、信州大学におきましては、ネットワーク参加者の施設に対しては、料金後払いで、文献入手も2週間から2日へと短縮され、大学の契約されている電子ジャーナル12000タイトルも依頼し、あれば即刻送付いただけるようになりました。文献入手においても便利になりました。

研修会も年二回の予定で開かれるようになり顔の見えるネットワークに、困った時は相談し会える仲間、スキルアップの場にしていきたいと思えます。

## 医学・薬学予稿集全文データベースの 利用動向とニーズ解析（２）

黒田明子

科学技術振興機構 情報提供部

昨年、独立行政法人科学技術振興機構（JST）の提供する医学・薬学予稿集全文データベースについて、2004年度の利用量を分析した。今回は、2005年度における利用量についてその変化を追った。また、2004年度・2005年度の日本看護協会の利用についても分析し、看護分野において利用の多い予稿集を整理した。

### 分析内容

学会名別、資料名別に、JMEDPlusからのリンクによる閲覧回数、JDreamでの医学・薬学予稿集全文データベース指定利用による閲覧回数、JDreamを介さない単体での利用による閲覧回数、および総合の閲覧回数をそれぞれ分析した。

### 分析結果

アクセス形式を問わず、総合的に閲覧回数の多かった学会

学会別の総合利用量データでは、2004年度、2005年度共に、日本看護学会および日本看護協会が発行する予稿集の閲覧回数が1、2位となっており、トップ10までは若干の入れ替わりがあるものの、よく閲覧される予稿集を発行する学会は固定されていると見てよい。これらのアクセス数は日本看護協会の会員ダイレクトからによるものが多い。

2004年度、2005年度の会員ダイレクトの利用から、以下が明らかとなった。会員ダイレクトから各文献へのアクセス状況を見ると、医学・薬学予稿集全文データベースを経由しての利用のほうが多く、学会名を指定しての検索が好まれていると言える。

「日本看護学会」が発行する予稿集は、医学・薬学予稿集全文データベース経由での利用が突出しており（ほぼ100%）、学会指定での検索が多いと思われる。

一方、「日本看護協会」が発行する予稿集は、JMEDPlusからのアクセスが突出しており（ほぼ100%）、両組織が発行する予稿集へのアプローチの違いが明らかである。

順位	2004年度に予稿集利用の多かった学会	順位	2005年度に予稿集利用の多かった学会
1	日本看護学会	1	日本看護学会
2	日本看護協会	2	日本看護協会
3	日本透析医学会	3	日本透析医学会
4	日本臨床外科学会	4	日本臨床外科学会
5	日本看護研究学会	5	日本薬学会
6	日本消化器外科学会	6	日本看護研究学会
7	日本薬学会	7	日本化学会
8	日本化学会	8	日本社会保険医学会
9	日本消化器病学会	9	日本消化器外科学会
10	日本社会保険医学会	10	日本消化器病学会



# 医療分野における 図書館パスファインダーの可能性を探る（２）

市川美智子、坪内政義  
愛知医科大学医学情報センター（図書館）

## 背景と目的

第22回大会（2005年7月）で、パスファインダー(Library Pathfinder)が初学者の情報探索行動を手助けする有用なツールであることを紹介した。その発表では、医療系図書館（室）にパスファインダーをPRすることを目的としていたため、作成上の基本的なポイントやメリットを中心に取り上げた。その後、当館では学部生向けにパスファインダーを作成していたが、一般市民向けにアレンジしたものをホームページで公開することで、患者や地域住民の情報収集活動を支援できるのではないかと考えるようになった。そこで今回の発表では、消費者医療情報サービスの観点から試作したパスファインダーを展示する。公開に向け、すでに患者図書室等を展開している参加者や公共図書館の方々から意見を伺うとともに、各機関と連携を持つ機会としたい。

## 学部生対象と一般市民対象（試作）の主な違い

項目	学部生対象	一般市民対象（試作）
形式	html形式	印刷、保存、加工が可能なWord形式も用意
掲載情報のレベル	基本知識といえども、専門書を中心とし、外国語DBも対象とする。	薬品、治療、介護、栄養、闘病記など、一般市民のニーズに見合う情報を中心に展開。公共図書館OPACや国内文献情報の探し方も対象とする。
注記	特になし	「EBMとは」、「診療ガイドラインとは」、「医学書選びのポイント」などを盛り込む。

## 今後の課題

学部生対象の情報と一般市民対象の情報をひとつのパスファインダーに集約し、記載した情報に「専門度レベル」や「推薦レベル」を付記することを模索している。図書館員個人の経験や判断に偏らず、どの主題に対しても平等で適切な格付けを付すのための指標作りが課題である。

## 主要参考文献

- (1) 鹿島みづき、山口純代、小嶋智美．パスファインダー・LCSH・メタデータの理解と実践：図書館員のための主題検索ツール作成ガイド．東京：紀伊國屋書店，2005．
- (2) 市川美智子．図書館パスファインダー作成報告とその可能性．医学図書館 2006；53(1)：55-59．

## 病院図書室の業務分析（１）

### -担当者の専門性は活かされているか-

寺澤裕子<sup>1)</sup>、山室眞知子<sup>2)</sup>、中村友紀<sup>3)</sup>

1)関西労災病院図書室、2)京都南病院図書室、3)星ヶ丘厚生年金病院図書室

近年の医療制度改革により病院の運営は厳しい様相を呈し、それに伴って病院図書室の運営方法や担当者の雇用形態も派遣やパート職員が主となり厳しい条件下にあるが、司書資格を有する者が増加している。しかしながら司書として、また病院図書室担当者としての専門性が病院管理者層に認識されているのだろうか、また日常業務の中でその専門性が活かされているのか、活かされていないのであればそれを制約している因子は何かを考察するために、われわれは図書室担当者の業務と業務量の調査・分析を行うことにした。本研究は平成 17 年度近畿病院図書室協議会研究事業助成金を受けて 2 年間にわたり行うもので、今回はその中間報告として、アンケート調査結果を次のようにまとめる。

近畿病院図書室協議会では毎年会員へ年度統計調査と、隔年で管理機能・サービス機能面からみた詳細な年次統計調査を行っている。このうち平成 15 年度調査時に回答のあった 81 機関を対象にして今回のアンケート調査を行い、うち 63 機関の協力を得た。このアンケート結果を、前述した年度統計調査 5 年分とその間 2 回行われた年次統計調査を背景にして分析し、今後も継続して追跡調査を行う。

医学図書館司書という資格はないが、文部科学省の出す「司書の主な職務内容」6 点<sup>1)</sup>に添って病院図書室担当者の業務を検討しその専門性についても示したい。

1) 文部科学省ホームページ 司書について-3. 図書館職員になるためには  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm#01](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm#01)[2006.5.19]